

平成28年度の高齢期の幸福度調査の追跡調査報告
【令和元年度実施】（概要版）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所
増井 幸恵

目次

| | |
|------------------------------------|---|
| 1. 本調査の目的..... | 2 |
| 2. 調査の方法..... | 2 |
| 2-1. 調査項目と手続き..... | 2 |
| 2-2. 調査対象者および参加者..... | 2 |
| 2-3. 調査期間..... | 3 |
| 2-4. 倫理的配慮..... | 3 |
| 3. 調査参加状況..... | 3 |
| 4. 亀岡市高齢者における主要変数の3年間の変化..... | 5 |
| 4-1. 幸福感の変化..... | 5 |
| 4-2. 要介護リスク（基本チェックリスト）の3年間の変化..... | 5 |
| 4-3. 握力の3年間の変化..... | 6 |
| 4-4. 老年的超越の3年間の変化..... | 6 |
| 5. 幸福感の関連要因の検討..... | 7 |
| 5-1. 3年後の幸福感低下を引き起こす要因の検討..... | 7 |
| 6. 亀岡市高齢者の3年間の追跡調査からわかったこと..... | 7 |

1. 本調査の目的

『高齢期の幸福度調査』は平成 28 年度より実施されており、市内高齢者を生物学的な面と心理的な面から調査を行い、亀岡市における有効な地域包括ケアシステムの下、幸せで健康的な高齢期を創設する為のエビデンスデータの蓄積を行うことを大きな目的としている。

ここで報告する調査は、平成 28 年度（2016 年度）に参加した自立高齢者に対して 3 年後の追跡調査を実施したものである。追跡調査を行うことにより、亀岡市在住の地域在住高齢者の、幸福感、機能状態、体力、および心理状態（老年的超越）の側面についての、経時的変化に関するエビデンスデータを蓄積し、その変化の様子を明らかにできる。この追跡データを収集することにより、平成 29 年から実施されている『介護予防・日常生活支援総合事業』の効果についても量的な側面から評価が可能になることが期待される。

今回の追跡調査においては、幸福感（WHO-5）、機能状態（基本チェックリスト）、体力（握力）、心理状態（老年的超越）といった高齢者の基本的な状態像を示す指標に加え、それらに影響すると考えられる、日中の過ごし方や主観的な経済状況などの項目を収集した。これらのデータから、亀岡市高齢者の 3 年間の、基本的な状態像の変化および、それに関連する要因を検討する。

なお、この「高齢期の幸福度」調査については、ベースライン調査が平成 28 年度から平成 30 年度の 3 年間にわたって行われているが、今回の追跡調査ではそのうち平成 28 年度に調査を実施した参加者の追跡調査となる。今後、平成 29 年度、30 年度の参加者への追跡調査を順次行っていき、最終的にデータが完成するのは令和 3 年度となる。

2. 調査の方法

2-1. 調査項目と手続き

①主観的健康感：1 項目

②精神的健康感（幸福感）WHO5-J：5 項目

③厚生労働省 基本チェックリスト（KCL）：20 項目 本調査では、うつについての 5 項目以外の 20 項目での調査を行っている。

④日本版老年的超越質問紙改訂版の短縮版：12 項目

⑤日中の過ごし方：日中の過ごし方について、①収入のある仕事、②ボランティア、③田畑の仕事、④家事、⑤家族の介護、⑥孫の世話、⑦運動、⑧学習・教養、⑨その他、について、それぞれ実施の有無をうかがった（複数の質問で「はい」を許す形）。また、⑦、⑧、⑨については具体的に何を行っているかを尋ね、コーディングを行った。

⑥経済的状况：現在の経済的状况について、大変苦しい、やや苦しい、ふつう、ややゆとりがある、大変ゆとりがある、の 5 段階で評定した。

⑦身体指標：身長（参加者からの聞き取り）、体重（実測ができない場合には聞き取り）、握力（実測のみ：基本的に立位で測定）。

⑦調査手続きおよび分析方法

調査は、対象者全戸に対して訪問を行い、調査員による聞き取り調査を実施した。収集されたデータは、IBM SPSS Statistics バージョン 25 を用いて統計的分析（記述統計値の算出、t 検定、分散分析、相関係数、重回帰分析など）を行った。

2-2. 調査対象者および参加者

本調査のベースライン調査となる平成 28 年度調査（2016 年調査）の自立高齢者の訪問調査においては、亀岡

市に在住する 70 歳以上の自立高齢者 1,074 人を対象として実施し 630 人が調査に参加した。このうち、令和元年 5 月 10 日現在で、死亡(29 人)、転出 (3 人)、要介護認定者 (44 人)、要支援認定者 (7 人)、その他の理由 (26 人) の計 108 人が追跡調査の対象外となった。

これらを除いた 521 人が、ベースライン調査の 3 年後の令和元年度 (2019 年度) の調査対象者となった。この 522 人に対して、調査依頼状を郵送した後、訪問調査実施した。その結果、調査完了 439 人 (参加率 84.3%)、不在 57 人、死亡 4 人、転出 1 人、住所不明 3 人、要介護・要支援・入院中が判明 6 人、拒否など 12 人となった。参加者の平均年齢は 77.8±6.0 歳であった。

2-3. 調査期間

令和元年 5 月 20 日 (月) ~9 月 30 日 (月) に実施した。

2-4. 倫理的配慮

亀岡市個人情報保護条例に基づいて実施された。訪問時に対象者に調査の趣旨を説明し、了承を得た時点で同意とみなした。

3. 調査参加状況

表 3-1-1 に、2016 年度調査に参加した自立高齢者 630 人の 2019 年 5 月 10 日時点での転帰状況を示す。

表 3-1-1. 2019 年度調査参加者の令和元年度調査前の転帰状況

| | | 2019年度 対象者 | 死亡 | 要介護へ 変化 | 要支援へ 変化 | 転出 | その他の 理由 | 合計 |
|--------|----|---------------|------|------------|------------|------|------------|--------|
| 2016年度 | 人数 | 521 | 29 | 44 | 7 | 3 | 26 | 630 |
| 参加者 | 割合 | 82.7% | 4.6% | 7.0% | 1.1% | 0.5% | 4.1% | 100.0% |

平成 28 年度の自立高齢者への調査参加者のうち、12.7%が 3 年間で死亡、要介護化、要支援化と自立度が悪化したことが示された。2019 年度の自立高齢者の調査においては、死亡、要介護・要支援へ変化、転出、その他の理由によって調査が不可能となった 108 人を除外して調査を実施した。

表 3-1-2 に、2019 年度調査対象者の参加状況を男女別に示した。対象者 521 人中、調査に参加した者は 439 人 (男性 200 人、女性 239 人) であり、参加率は全体で 84.3%あった。また、2016 年度調査参加者の追跡率は 69.7%であった。

表 3-1-2. 2019 年度調査対象者の参加状況

| | | 参加 | 不在 | 拒否 | 死亡 | 要支援・ 要介護化 | 住所不明 など | 合計 |
|----|----|-------|-------|------|------|--------------|------------|--------|
| 男性 | 人数 | 200 | 26 | 6 | 3 | 2 | 2 | 239 |
| | 割合 | 83.7% | 10.9% | 2.5% | 1.3% | 0.8% | 0.8% | 100.0% |
| 女性 | 人数 | 239 | 31 | 5 | 1 | 2 | 4 | 282 |
| | 割合 | 84.8% | 11.0% | 1.8% | 0.4% | 0.7% | 1.4% | 100.0% |
| 合計 | 度数 | 439 | 57 | 11 | 4 | 4 | 6 | 521 |
| | 割合 | 84.3% | 10.9% | 2.1% | 0.8% | 0.8% | 1.2% | 100.0% |

表3-1-3に、年代別・性別の参加者数を示した。男女合わせて、70歳群（調査時の年齢平均73.1±0.2歳）255人、80歳群（平均年齢83.1±0.2歳）158人、90歳群（平均年齢92.7±0.6歳）26人が参加した。2016年度調査参加者の追跡率は、男性67.3%、女性69.7%、70歳群76.8%、80歳群65.6%、90歳群45.6%であった。

表3-1-3. 年齢群別・男女別の参加者数

| | 男性 | 女性 | 合計 |
|------|-------|-------|--------|
| 70歳群 | 111 | 144 | 255 |
| 割合 | 43.5% | 56.5% | 100.0% |
| 80歳群 | 80 | 78 | 158 |
| 割合 | 50.6% | 49.4% | 100.0% |
| 90歳群 | 9 | 17 | 26 |
| 割合 | 34.6% | 65.4% | 100.0% |
| 合計 | 200 | 239 | 439 |
| 割合 | 45.6% | 54.4% | 100.0% |

次に、地域別・男女別の参加者数を表3-1-4に示す。各地区別の2016年度調査参加者の追跡率は、亀岡77.8%、川東66.3%、西部67.0%、中部69.1%、南部62.7%、篠72.9%、つつじヶ丘82.0%であった。

表3-1-4. 地区別・男女別の参加者数

| | | 男性 | 女性 | 合計 |
|---------|----|-------|-------|--------|
| 亀岡地区 | 人数 | 16 | 26 | 42 |
| | 割合 | 38.1% | 61.9% | 100.0% |
| 川東地区 | 人数 | 24 | 33 | 57 |
| | 割合 | 42.1% | 57.9% | 100.0% |
| 西部地区 | 人数 | 36 | 35 | 71 |
| | 割合 | 50.7% | 49.3% | 100.0% |
| 中部地区 | 人数 | 61 | 51 | 112 |
| | 割合 | 54.5% | 45.5% | 100.0% |
| 南部地区 | 度数 | 24 | 40 | 64 |
| | 割合 | 37.5% | 62.5% | 100.0% |
| 篠地区 | 度数 | 19 | 24 | 43 |
| | 割合 | 44.2% | 55.8% | 100.0% |
| つつじヶ丘地区 | 度数 | 20 | 30 | 50 |
| | 割合 | 40.0% | 60.0% | 100.0% |
| 合計 | 度数 | 200 | 239 | 439 |
| | 割合 | 45.6% | 54.4% | 100.0% |

4. 亀岡市高齢者における主要変数の3年間の変化

4-1. 幸福感の変化

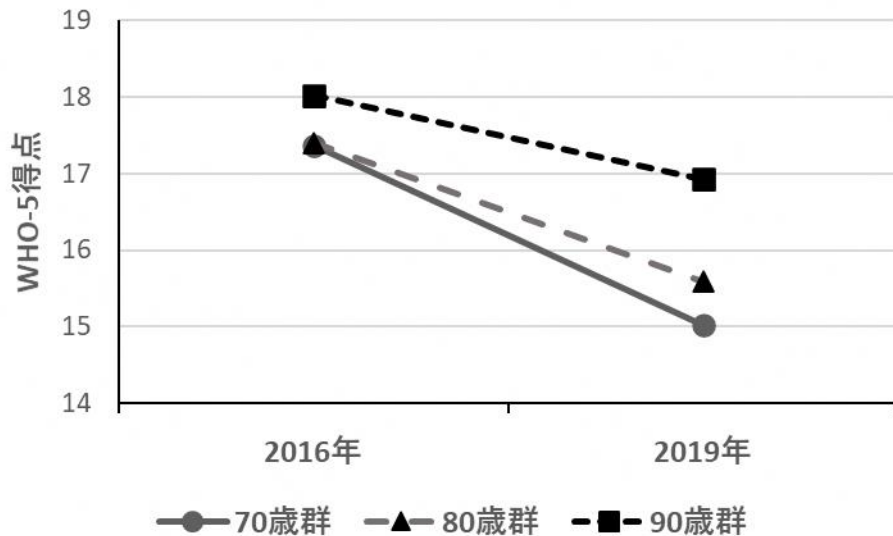


図4-1-1. WHO-5得点の年齢群別の3年間の変化（性別を調整）

図4-1-1は、性別を調整し男女を込みにした年齢群別のWHO-5得点の3年間の変化を示したものである。どの年齢群も有意にWHO-5得点は低下した（ $F(1,431) p<.001$ ）。70歳群よりも90歳群の方が低下は小さいように見えるが、この差は有意ではなかった。

4-2. 要介護リスク（基本チェックリスト）の3年間の変化

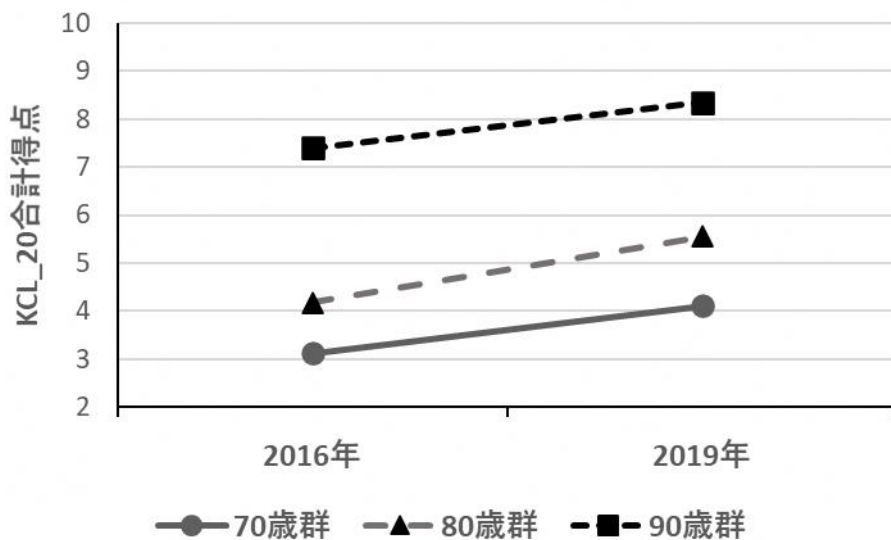


図4-2-1. 年齢群別の基本チェックリスト得点の3年間の変化（性別を調整）

図4-2-1は、性別を調整し男女を込みにした年齢群別の基本チェックリストの20項目合計得点の3年間の変化を示したものである。すべての年齢群で、3年間で要介護リスクが増加することが有意に示された（ $F(1,433)=17.3 p<.000$ ）。

4-3. 握力の3年間の変化

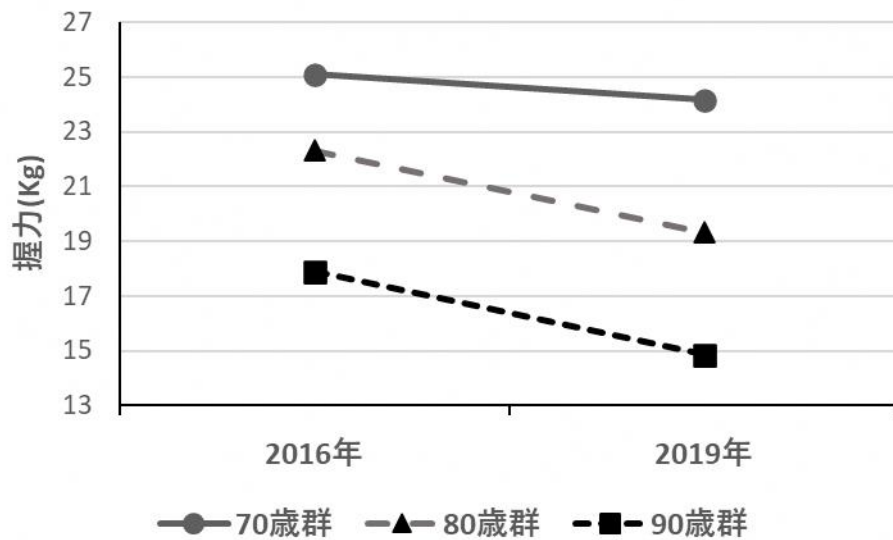


図4-3-1. 年齢群別の握力の3年間の変化（性別を調整）

図4-3-1は、性別を調整し男女を込みにした年齢群別の握力の3年間の変化を示したものである。分析の結果、年齢群×調査年の交互作用が有意であり（ $F(2,193)=5.2$ $p<.01$ ）、80歳群、90歳群では3年間で握力が有意に低下するが、70歳群では握力が低下しないことが示された。

4-4. 老年的超越の3年間の変化

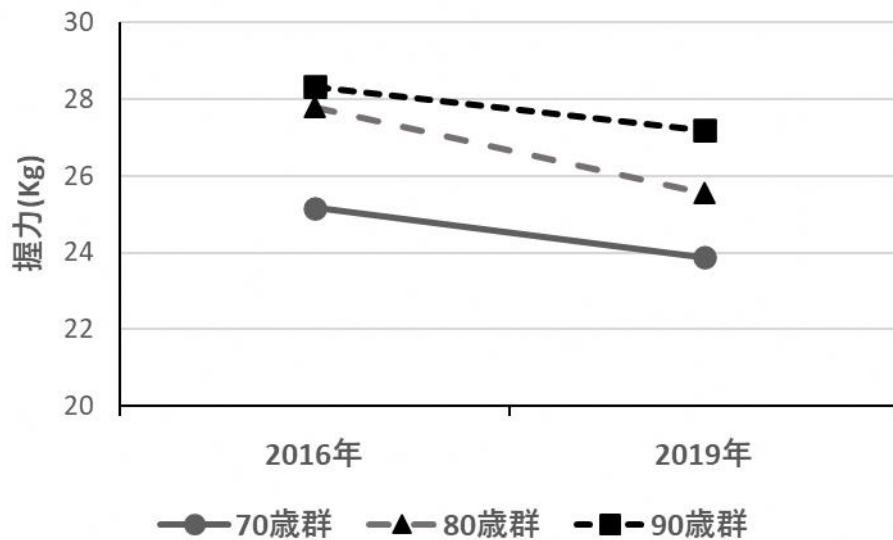


図4-4-1. 年齢群別の老年的超越の3年間の変化（性別を調整）

図4-4-1は、性別を調整し男女を込みにした年齢群別の老年的超越の3年間の変化を示したものである。すべての年齢群において、3年間でやや老年的超越が低下するという有意傾向が示された（ $F(1,425)=3.59$ $p<.1$ ）。

5. 幸福感の関連要因の検討

5-1. 3年後の幸福感低下を引き起こす要因の検討

表5-1-1. 2019年度のWHO-5得点の低下と関連するH28年度変数

| | 男性 | | 女性 | |
|-------------------|--------------|------|--------------|------|
| | β | p | β | p |
| 年齢群 | .149 | .036 | .074 | .296 |
| 2016年度WHO5得点 | .500 | .000 | .292 | .000 |
| 2016年度基本チェックリスト得点 | -.125 | .072 | -.150 | .035 |
| 2016年度握力 (kg) | .028 | .685 | .048 | .449 |
| 2016年度老年的超越 | -.026 | .705 | .172 | .016 |
| 調整済みR2 | .307 | | .207 | |
| p | .000 | | .000 | |

次に、3年間の幸福感（WHO-5得点）の低下を引き起こす要因を検討するために、2019年度WHO-5得点を目的変数、年齢群（70歳群=1、80歳群=2、90歳群=3）、2016年度のWHO-5得点、基本チェックリスト得点、握力、老年的超越を説明変数とする重回帰分析を、男女別に行った。表5-1-1に、各説明変数の標準化偏回帰係数（ β ）とその有意確率（p）、男女別の調整済み説明率（R²）とその有意確率を示した。

分析の結果、男性と女性で異なる結果が見られた。男性では、2016年度の基本チェックリスト得点が高い程、3年後のWHO-5が低下する有意傾向がみられ、年齢群および2016年度のWHO-5得点が高い程、3年後のWHO-5が有意に向上することが示された。一方、女性では、2016年度の基本チェックリスト得点が高い程、3年後のWHO-5が有意に低下すること、2016年度のWHO-5得点と老年的超越が高い程、3年後のWHO-5が有意に向上することが示された。

6. 亀岡市高齢者の3年間の追跡調査からわかったこと

令和元年度の「高齢者の幸福度調査」においては、平成28年度にベースライン調査に参加した自立高齢者に対して追跡調査を実施した。その結果、主要変数である、幸福感（WHO5）、要介護リスク（基本チェックリスト）、体力（握力）、心理的発達（老年的超越）のすべての側面で悪化がみられた。今回の調査は、H28年度からH30年度に行ったベースラインとなる調査の一部であるので、この傾向が調査した参加者全体に影響するものであるのか、今後確認する必要がある。また、追跡調査においては、一般に前回の得点がよいと次回の得点が悪くなるという回帰の効果があることが知られており、ただちにこの結果から参加高齢者の状態が悪くなったとは結論できない部分もあり、今後も参加者の追跡を行っていく必要がある。

一方、男女ともH28（2016）年度の要介護リスク（基本チェックリスト）が高いと、3年後（2019年）の幸福感がより低下しやすいことがわかった。また、女性においては、H28（2016）年度の老年的超越が高ければ、幸福感が高く維持されることも示された。高齢者の幸福感の向上のためには、要介護リスクを低下させる取り組みが必要であると同時に、老年的超越を高めることの重要性もまた示された。